小橋敏弘の ニッポン大好き！Hello Japan

ヨーロッパ在住40余年、外から見ていた日本！

Vol.27 一味違う夜の散歩コースはお墓

やっと長い冬が終わり春が感じられる季節になったスイスです。この原稿は4月8日に書いています。日本の北海道とほぼ同じぐらい高い緯度に位置するスイスですが、やっと4月に入り日の沈むのが遅くなりました。とは言え愛犬Ｌｕｃｙとお休み前の散歩は夜の２１時ごろになります。

スイスでは大小を問わず、どこの村の中心にも必ずと言ってよいほど教会があります。私の住んでいる村も中心にはゴシック調の大教会があり、その教会の横には村の多くの村民が眠る墓地も隣接しています。

ほぼ村の中心に住んでいる筆者は、愛犬Ｌｕｃｙと就寝まえの散歩をする際に、よくその教会周りやそれに隣接されている墓地とかを時々歩きます。友達とか嫁から、夜にお墓を散歩するのは怖くないのかとよく言われますが、愛犬のＬｕｃｙと一緒に散歩していると、不思議と怖いとか気持ちが悪いとか感じた事がありません。理由は今一つ分からないのですが、墓石に向かって「僕はまだこの世に生かさせてもらっていますよ、お墓の下に眠られている皆さんはもうあの世ですか」とか、わけの分からない事を一人でつぶやいたりもします。

さて今日のテーマはそのお墓です。なぜ人は西洋、東洋にかかわらずお墓をつくるんでしょうね。キリスト教、仏教、イスラム教と宗派を超えて、世界中で大小さまざまなお墓が作られていますよね。

そこでChatGTPに人が墓をつくる最も根源的な理由を尋ねてみたら次のような回答をえられました。

「死者がいなくなってしまうことへの不安を和らげるため。人間は、目に見えないものを完全に信じ続けるのが苦手です。だからこそ、ここに眠っている、ここに行けば会える、ここで思い出せる、という具体的な場所をつくることで、喪失の痛みを扱いやすくしてきました。これは宗教以前の、ほぼ本能的な行動です」と言う回答がなされました。

では亡くなられた人の写真を飾るだけでは、その不安を和らげられないのでしょうか。

写真にはない「墓の役割」

① 境界（けじめ）をつくる写真は「生前の姿」を永遠に残します。一方、墓は「死後の場所」を象徴します。

写真 ↓ 生きていた時間の延長

墓 ↓ 死を受け入れるための境界線

この**境界**があることで、人は喪失を現実として受け止めやすくなる。

そこで筆者は素朴と言うか、お恥ずかしいほど幼稚な知識を振り絞ってぶち当たった疑問が、なぜ人は、死ぬと天国へ召される、とか言うのか。魂が体から離脱し天を目指して上っているような映像をよくみます。特にヨーロッパのキリスト教徒の教会の壁画には、天使に誘われて天国へ向かっている人の描写がよくみられます。と言う事は、いったん天使と共に天国に行った死者は、お墓にて自分の家族にまた会えると言う事なのでしょうか。前書きでは、墓は「死後の場所」を象徴すると明記されているのですが、死んだ人は天国には行かず、ひたすら誤解している（？）のでしょうか、ちょっと不思議に思われませんか。小笑

と言うわけで、ちょっと変わった真夜中のお墓の散歩のお話（スイスから怖いようなバカバカしい）でした。

写真/筆者（右）と妻

profire 小橋敏弘

年齢、もうすぐ７０歳。

１９７５年からヨーロッパ在住。その大半はスイスの企業にてサラリーマン生活をし、６４歳からリタイア生活をエンジョイしています。

学生時代をイギリスで過ごし、大学卒業後はスイスに移住。孫６人に囲まれている爺さんです。

趣味は何にでも興味を持ち、最近ではChat　GTPを駆使して、幅広い分野を勉強中。

母国語日本語を再勉強しながら、ドイツ語、英語も同時に駆使し、ヨーロッパ各国に住んでいる友達とコミュニケーションを取っています。

唯一、体を動かす趣味は、ここ１０年ほど毎週一回ぐらいのペースでやっておりますCountry Line Danceです。